

# 倉橋惣三の誘導保育 —ごっこ遊びに焦点を当てて—

石川 洋子\*

## A Study on Sozo Kurahashi's Theory of Infant Education: Focusing on Social Pretend Play

Hiroko ISHIKAWA

**要旨** 倉橋惣三の保育理念と誘導保育論は、のちの保育界に多大なる影響を与えた。とくに、「何かしらまとまりをあたえるもの」として挙げたごっこ遊びは、それを学んだ多くの保育者にとり、日々の保育の大きな指針となり、今日に至っている。

倉橋は、ごっこ遊びにおける想像性の重要性を説き、子どもが何気なくやっている自由遊びの中の各要素、主題と計画と期待効果を自然のまま以上にはっきりさせ、一定の継続時間があれば誘導保育案の特質を具えろとしたが、一方、子どもの心理を知り、その気持ちに寄り添うことの大切さも説いた。多くの保育者や教育者たちの共感を得、その目指すところや保育が今に引き継がれている所以であろう。

一方、発達心理学の分野において、ごっこ遊び等の遊びの実証的研究に先鞭をつけたのはピアジェであるが、模倣に関しては、反射による初期の模倣から、2歳までに後発模倣（延滞模倣）が現れ、これが心象、象徴作用を作り、その後、認識的表象の段階に移行するとした。近年は、ふり遊びや見立て遊びから、イメージやファンタジー、ごっこ遊びへと広がる発達的变化、ごっこ遊びの教材研究、保育者の役割に関する研究など、多くの研究がなされるようになってきている。

ごっこ遊びがもたらす子どもの内面の充実、イメージや思考の発達への寄与など、ごっこ遊びの意味や意義について、教育学や保育学、心理学等のさまざまな分野からの多くの知見を統合し、幼児教育に活かしていくことが必要と思われる。

**キーワード**：倉橋惣三 誘導保育 ごっこ遊び 幼児教育

### 1. はじめに

倉橋惣三は、その保育の理念と具体的保育方法において、のちの保育界に多大なる影響を与えた。とくに、実践の中から理論化された誘導保育論は、それを学んだ多くの保育者にとり、日々の保育の大きな指針となり、今日に至っている。

倉橋の保育理論の集大成とも言える幼稚園真諦<sup>1)</sup>では、保育案の意義と必要性について言及してい

る。誘導保育案では、実際には、水族館や汽車遊び、八百屋遊びなどをあげているが、これらは「何かしら子どもの生活にまとまりをあたえるようなもの」であればよいとしている。いわゆるごっこ遊びである。

また倉橋は、同書の中で、「人間には自由を求める自然の要求があると同時に、自分の生活に向かって、あるまとまりを求める自然もあるものです<sup>2)</sup>。」とも言う。この子どもに「まとまりを与える」という指摘は、子どもの心的発達にとって非常に重要な

\* いしかわ ひろこ 文教大学教育学部心理教育課程

指摘であると思われる。

子どもは1歳半頃になると、何かの「ふり」や何かになった「つもり」の行為を始める。目の前にないものを表象し、その中で自分で短いストーリーを作り遊ぶのである。一体、子どもの内部で何が起きているのか未知ではあるが、これらの「ふり行為」がやがてテーマのある「〇〇ごっこ」となり、それが複数の子ども達に共有され、ダイナミックなごっこ遊びへと発展していく。自分達が何になっているのか、何をテーマとして、どんな展開で遊ぼうかという意識や予想を積み重ね、これらが子どものイメージ遊びや思考の発達とつながっていく。こういった内面の発達の重要性を考えると、倉橋の言う「まとまりをあたえる」保育をすることの意義と重要性を実践の中から見出した知見と卓見は、素晴らしいものだと思う。

倉橋の指摘以降、「ごっこ遊び」が非常に意味あるものとして保育や保育案のなかに取り入れられ、実践に移されるようになった。幼児教育の重要性がますます意識されるようになってきている今日まで、遊びの中心となっていることを我々は再認識すべきと思う。

本論では、誘導保育論で提案された、このごっこ遊びの意義に焦点を当てて考察したい。

## 2. 倉橋惣三の誘導保育

倉橋惣三は、1882年（明治15年）静岡に生まれた<sup>3)</sup>。幼少期を岡山県で過ごした後上京し、東京帝国大学文科大学哲学科に入学し心理学を専攻し、1906年（明治39年）に卒業した。1910年（明治43年）に、東京女子高等師範学校講師となり、附属幼稚園にも出入りする中で、保育に魅せられていく。1917年（大正6年）、東京女子高等師範学校の教授となると同時に、附属幼稚園の主事となり、実践から得られたさまざまな知見を発表していく。

同校の附属幼稚園内にあった保育の研究会「フレール会」の機関誌「婦人と子ども」の編集に関わっていたが、1918年（大正7年）の「幼児の教育<sup>4)</sup>」では、「本真剣」と題した論文を載せている。ここで倉橋は、子どもに向かって一番大切にしていることは本真剣になれる子どもになってもらいたい

ということであると言っている。本真剣とは、「全心全力を舉げて一定時内唯一のことに集注して居る」ことであり、これは最も積極的な精神生活であり、子どもの自然の特性の一つであるという。これは、遊びを重視し、遊び込むことを重視する言葉であり、今で言えば、集中することから育つ内面や思考の発達を教えたものであろう。

倉橋は、1919年（大正8年）から1921年（大正11年）まで、文部省から在外研究員として欧米留学を命じられ、デューイを学び、コロンビア大学のキルパトリック、ヒル等<sup>5)</sup>の園を見学し交流した。ここで多くの示唆が得られたと思われる。

帰国後附属幼稚園主事に戻り、「幼児の教育」に、多くの論文を書いている。

1924年には、「自発活動と目的活動—保育原理の問題一<sup>6)</sup>」と題して論文を書いている。ここでは、自発活動と目的活動を対概念として扱っているが、まず自発活動について、これを心理学上で言えば衝動であり、あらゆる衝動は外部的刺激なしに起こるものではないとした。そして、自発活動の具体的例として、まとまったものとしてあげられるのが遊戯であるとし、これを重視している。さらに、この遊戯を心理学上の問題として、あるいは説明概念を見出したいとして、スペンサーやグロース、スタンレーホール等の説を紹介している。

一方、自発活動と対立する概念として目的活動を取り上げ、プロジェクト・メソッドをその代表的なもの<sup>7)</sup>として紹介している。そしてこの目的活動は子どもの自発的な興味と関連しなければならない。目的活動が大きな一つの自発活動の中に入ったときだけ教育上の意義が出てくる、いわゆる自発的目的活動というものになる<sup>8)</sup>としているのである。これらの考え方が、その後の誘導保育案へとつながっていくようである。

1931年には、「幼児の心理と教育<sup>9)</sup>」の論文の「幼児の想像性」の中で、遊びやごっこ遊びの想像性について次のようにその特質と重要性を述べている。

「幼児期生活の本質があそびに於いてあらはるることを詳述したが、更に其の生活の一主調をなしてゐるものは想像である。・（略）・普通には模倣として見られるところの何々ごっこ

あそびは、皆、豊富なる想像によって補充されてある。」

そして、1934年（昭和9年）には、先に述べたように「幼稚園保育法真諦<sup>10)</sup>」（1953年「幼稚園真諦<sup>11)</sup>」と改題し刊行）を発表した。

「幼稚園真諦」の幼稚園保育法編において、「生活を生活で生活へ」という生活重視の思想と、「子供が真にそのさながらで生きて動いているところの生活をそのままにしておいて、それへ幼稚園を順応させていく<sup>12)</sup>」という出かけ保育の論を展開している。

また倉橋は、幼稚園の保育について、幼児のさながらの生活—自由・設備—自己充実—充実指導—誘導—教導の順にすすむとしているが、この幼児生活の充実指導を「相手の内部に即しての内部指導である」「子供のしている自己充実を内から指導する」と、内面への援助であることを強調している。また、幼児生活の誘導のために、「幼児の生活は利那的であり断片的である」「その断片性に中心を与え、あるいは系統をつけさせてやるのが出来たら、興味が一段と広く大きくなって来るだろう<sup>13)</sup>」と書いている。

そして、保育案の実際編の誘導保育案の中で、「何かしら子供の生活にまとまりを与えるようなものとして用意していく<sup>14)</sup>」という誘導保育案を展開していくのである。

この「まとまり」をいくつ選ぶのかということについては、子どもの年齢と、案そのものの性質をあげている。つまり、子どもの年齢が進むと、生活を連続させていく力が大きくなり、一保育期、あるいは一か年を1つの誘導案で通すことができるかもしれないとまで言っている。ここでは、心理学的な注意継続時間と興味継続時間という概念にまで論及している。

誘導案の性質については、案が発展性を多く含むものであれば、案そのものの力で誘導していけばよいとしている。この発展性については、外に向かって発展していくいき方と、内に向かって発展していくいき方があると言う。そして、内部発展の豊富であるものは、1つの主題で相当長く続き、外部発展が主になっているものは、小主題が変わっていかなければならないとしているのである。

誘導保育案の主題としては汽車でも八百屋でも何でも考えられるとしているが、次の2つ<sup>15)</sup>を重視している。

1. その年齢の子供がもっている興味的一般心理
2. 子供の環境が、その子供に促してくる興味、すなわち季節や年中行事や偶発事件など興味の社会条件

この誘導保育案については、1936年（昭和11年）の「幼児の教育<sup>16)</sup>」に、夏の講習の速記として「保育案」が載せられており、その中で、保育案の変遷と保育案の立て方を説明している。

倉橋は、保育案の変遷<sup>17)</sup>で、保育案問題のない時代から保育案が起こってきた最初のを「中心統合保育案」と紹介している。これについては、幼稚園の先生が漫然とその時の興味に即してやっていたものを立案的なものを考えだしたことに功績があるとしたが、子どもの自由な生活を認めなくなってしまったとした。

そしてこの反動として起こったものとして、「自由遊戯保育案<sup>18)</sup>」をあげた。この保育案は、子どもの自由遊びのままやっていくのがいいという案であり、180度の変わり方をしたとしている。

次に、この自由遊戯保育案の自然主義的なやり方に物足りなくなり、実生活において何か役立つものでなければならないとして、何かを生産させる遊びを行ってはどうかということでできたものを生産保育案<sup>19)</sup>とした。これは例えば、芋を煮て食物を拵えるといったように、世の中の産業にすぐに結びつくような遊びを重んじていこうというものであるとした。

その後、幼稚園のカリキュラムが考えられるようになり、保育項目の意味やねらいといった教科課程論が出たが、これが学科的教科的になりすぎたことに対して、次に、コロムビア大学で試みられたコンダクトカリキュラム<sup>20)</sup>を挙げている。これは、文字とか言語とか音楽といった知識技術の他に、手を洗うなどの日常の仕事動作に重きを置いたカリキュラムであるとしている。

そしてこのような変遷をたどった保育案の中で倉橋は、自由遊戯主義保育案の意義を認め、自由遊戯を保育案の重要な、基礎的部分に取り入れたのであ

る。この子どもの自由な自由遊戯と保育案の関係については、子どもが自由遊びといっても甚だしく思い掛けないことをするわけではなく、季節等の関係から子どもの遊びはある範囲内のものであり、先生が子どもの自由遊びにおよその見当をつけておくという意味で保育案の性質を帯びてくるとするのである。そして子どもの遊びの内容を豊かにすることをすすめる、これは自由を妨げるものではなく、幼稚園の保育として立派な用意であるとするのである。

一方、自由遊びから出てきたものであっても「歌を歌う」といった保育項目となると、教育を教育としてある期待効果（アテインメント、ねらい）を期待しており、この期待効果に基づいてやっていくのが立案的保育となってくるとしている。これらは、子どもが自然に自由にやる遊戯をそばでみていて、その中からいろいろな効果そのものを引き出そうとするが、一方、自由遊戯においては、その生活の後に生まれてくるのを待っているのであり、効果を期待しているのではないと言っている。

そしてこれらについて、保育項目を期待効果で考えることも大切であるが、もっと大きな全体的効果を期待するとき、誘導保育案が出てくるとしたのである。

倉橋は、自由遊びの中にある自己充実と充実指導、そして誘導保育として順序を示しているが、保育項目のもって行き方として、子どもの遊びからそれを提示している。まず、子どもの遊びを見ると、例えばままごとの中にも主題、テーマがあるが、すぐにやめてしまったりもするので、家庭遊びを主題にして、そこに計画を少し細かくつけていくと、誘導保育案ができてくるとしている。つまり、子どもが何気なくやっている自由遊びの中の各要素、主題と計画と期待効果を自然のまま以上にはっきりさせ、一定の継続時間があれば誘導保育案の特質を具えてくるとした<sup>21)</sup>のである。

一方、倉橋は、この誘導保育案について論じた同じ頃、1936年（昭和11年）に、「育ての心<sup>22)</sup>」を発表している。「こころもち<sup>23)</sup>」と題した節で倉橋は、子どもの気持ちを汲み、これに添って保育をしていくことの大切さを次のように述べている。

「子どもは心もちに生きている。その心もちを

汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い。・・・心もち心もちである。その原因、理由とは別のことである。・・・多くの人が、原因や理由をたずねて、子どもの今の心もちを共感してくれない。・・・殊に先生という人がそうだ。その子の今の心もちにのみ、今のその子がある。」

また、「子どもの心もち<sup>24)</sup>」と題した節では次のようにも述べている。

「心理学は児童の心理を分析して教えてくれる。それが、教育の正しき方法を知る為に、極めて必要な知識であることは言を俟たない。すなわち、児童に対する精しい理解である。しかし、それだけで、児童のすべてが知れたのではない。それを理解するほかに、味わい触れてやるという、大切な要件が残されている。」

以上のように、倉橋は、誘導保育案とその内容を具体的に提案する一方で、子どもの心理を知り、その気持ちに寄り添うことの大切さも説いている。多くの保育者や教育者たちの賛同を得、共感を得、その目指すところが今に引き継がれている所以であろう。

### 3. プロジェクト・メソッドの影響

倉橋の誘導保育案に関して、再評価がなされるようになっており、また多くの研究が行われている。

水野等<sup>25)</sup>は、倉橋悠三の誘導保育論へのキルパトリック、ヒルのプロジェクト・メソッドの影響を指摘している。そこでは、倉橋は、プロジェクト・メソッドについて生活を教育に取り入れた点や目的を取り入れた点を評価しているが、一方で、保育者が目的を意識しすぎるあまり、子どもの生活動力を弱めてしまう点を指摘していたとしている。そしてこのような優れた点と問題点の両方を誘導保育論に生かしたとしている。

橋川<sup>26)</sup>は、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに招聘されたヒルが、「実験遊戯室」の指導にあたりながら、その成果を1923年に「幼稚園と第1学年のコンダクト・カリキュラム」として出版し、それがわが国でも1933年、大阪市保育会研究調査部

から翻訳されたことを記しその影響を考察している。このカリキュラムは、子どもの生活に連続性と統一を持たせた点に特徴があるとした。1919年から文部省在外研究員として欧米に派遣された倉橋惣三もコロンビア大学附属幼稚園の実際を観察し、子どもの相互生活の重要性を再認識して帰朝したとしている。

また橋川はこの論文<sup>27)</sup>の中で、全米教育協会幼稚園部門会におけるブライアンの主張を紹介している。ブライアンは、自園で弟子のヒルが指導していた実験を根拠に、自由遊びを幼稚園の生活の土台に据えると同時に、子どもが明確な目的や課題が浮かばない時、教師は子どもが明確にイメージでき、興味を持って取り組めるような目的や課題を提示するよう言っているという。また、子どもが明確な目的を目指して遊び始め行動への手がかりを模索する中で、関係性を発見し、これが思考力へと結びつくとしたという。子どもの内面にはこうした論理的で秩序をもった過程が自然な連続性として進行しており、ブライアンはこれら活動的で創造的な連続性を意識化させることの重要性を言っているとしている。

以上、倉橋の誘導保育を中心にその歴史を概観してきたが、保育カリキュラムや保育案への研究が子どもの言動の観察などを中心になされるものの、それがもたらす子どもの内面の変化について言及されたものは多くないようである。さまざまに考えられた保育の中で、子どもにどのような変化や発達が起きるのか、我々はもっと内面に焦点を当てて考えていかなければならないと考える。

#### 4. ごっこ遊びと発達

保育者にとり、倉橋惣三の誘導保育案が出されて以降、ごっこ遊びは、自由遊びの中核をなす遊びとなっている。ごっこ遊びは、イメージ遊びの頂点であるとも言われ、幼児期の発達を促す重要な遊びの一つである。近年、幼保小連携が重要な課題となっているが、幼児の思考や学びを促すものとしても重要であると思う。

ごっこ遊びの前段階として、「ふり遊び」がある。「〇〇のふり」ができるということは、現実とは別の空想の世界、虚構の世界、イメージの世界を持ったことの表れと言える。生後わずか1年半ほどで、

自分だけの心の世界を持てる人間の不思議さを感じずにはいられない。この人間に特有のイメージの世界を大事にし、伸ばしていくことの重要性はもっと強調されるべきである。

ごっこ遊び等、遊びの実証的研究に先鞭をつけたのは、ピアジェである。ピアジェ以降、発達心理学等の分野の研究が大いに進んだ。

ごっこ遊びが始まる前に、子どもは重要な内的変化を見せる。ピアジェは、子どもの発達について数多くの知見を出しているが、知能発達について、次のような4つの発達段階<sup>28)</sup>に分けた。

1. 感覚運動的段階の知能（0 - 2歳）
2. 前操作段階の知能（2 - 7歳）
3. 具体的操作段階の知能（7 - 11歳）
4. 形式的操作段階の知能（11・12歳 - 14・15歳）

第1段階である感覚運動的段階をさらに6つに分けているが、模倣に関して、はじめは反射による初期の模倣からだんだん進化し、第6段階になると後発模倣（延滞模倣）が現れ、これが心象、象徴作用を作り、その後、認知的表象の段階に移行するとしている。

高橋<sup>29)</sup>は、ピアジェの象徴遊びに関する知見を紹介しながら、ふり遊びの発達を概観しているが、子どもではまず、現実生活における体験が知覚・判断・認知能力を通してイメージの世界に入力され、保管された記憶内容が遊びの文脈において出現するとした。そして、最も初歩のふりの行為は、日常生活における自己模倣か他者模倣の形をとり、「〇〇するふり」をするとする。この行為そのものは現実のコピーであり、知覚像がそのまま表出されたものであるが、イメージは発達するにつれて断片的ではなく相互間に繋がりが生じ、系列化され脈絡が見られるようになるとする。そして次の発達段階として空想やファンタジーが発生するとした。この世界は現実そのままのコピーではなく、イマジネーションの優れた働きにより願望と期待がこめられた世界であるとした。この個人的なふり遊びがやがて集団的なごっこ遊びへと発展し、個人的なファンタジーが共同のファンタジーとして広がっていく<sup>30)</sup>とした。

また高橋は、ピアジェが言及しなかったごっこ遊びはその後の研究者に委ねられたとして、ごっこ遊びをイメージと場面の共有、自己認識と役割分担と

コミュニケーションの面から検討している<sup>31)</sup>。仲間とのごっこ遊びでは、自己のイメージに加えて仲間のイメージも活用できるため、共同的な想像世界が多彩になること、ふり遊びにおいて他者の役割を演ずることが、他者の行為を通して他我が自己の中に採り入れられ、他者と自我の統合をはかることによって子どもの自我領域がより拡大される機会となるとしている。また、ごっこ遊びの中のコミュニケーションを通して、発信者と受信者が交互に入れ替わりながらイメージが時々刻々と変化しふくらみ、イメージがより多彩になる。4～5歳児に達すると、子どもは相手からのメッセージに応じて自己のイメージを呼び出し、あるいはそれを調整することが上手になる。また適切なメッセージにより相手のイメージに影響を与えるスキルも獲得するとしている。

また、ふり遊びを行わなかったり、その発言年齢が遅れることについて、欠如と差異の問題に言及し、人間が柔軟性をもって状況や課題場面に対処することに深くかかわるイマジネーションは、発達することが望ましい人間の特質であるとして、その発達の遅れは改善への配慮がなされる必要がある<sup>32)</sup>としている。

ごっこ遊びの研究は、とくに近年、多くなされるようになってきている。研・佐藤<sup>33)</sup>は、ごっこ遊びの見立て行動に関わる教材や保育者の働きかけの効果を検討し、見立て行動促進のための新たな教材は、その特性に引きずられたり場面の転換が起きることが見られたが、特性への理解が進むと、自由で多様な見立て行動が見られることを指摘した。また、見立てを真似る幼児の存在が共有化を促進することや保育者の働きかけが見立て行動を促進したり、幼児の思考を深める役割を果たすことなどを報告している。

青野・吉岡<sup>34)</sup>は、精神発達遅滞と診断された4歳児のプレイセラピーを通して、ごっこ遊びの変遷とセラピストの役割をまとめている。ごっこ遊びの特徴からその時期を、ふり・見立ての確立期、ごっこ遊びの始まり、日常生活の経験のごっこ遊びへの反映、幼稚園での経験のごっこ遊びへの反映、ごっこ遊びの決まり事の複雑化、遊びのイメージの拡充

と他者のかかわり、想像力を働かせながらのごっこ遊びの展開に分けている。そしてごっこ遊びにおけるセラピストが、イメージ世界を豊かに生きていくための仲介役としての役割を担っているとした。

荒井・荒木<sup>35)</sup>は、ごっこ遊びから役割遊びへの移行のメカニズムについて、自分を人・物に見立てるごっこ遊びの段階から、自分で状況設定をして遊びを展開する段階を経て、役割遊びへ移行するという発達過程を示唆している。また、セラピストが遊びのモデルを教育的に用意することで、遊びのレパートリーを量的に拡大し、それを子ども自身が発展し質的に変化させていくための土台をつくるのが重要であったということを報告している。また、子どもの経験や社会的役割をふくむ遊びに着目してプレイセラピーを実施することが、子ども同士の社会的相互交渉を豊かにするうえでも重要な視点になると指摘している。

## 5. まとめ

倉橋惣三の誘導保育におけるごっこ遊びの重要性の指摘と発展を、また、心理学的見地から、ふり遊び、ごっこ遊びの発達と意味を概観した。ごっこ遊びがもたらす子どもの内面の充実、イメージや思考の発達への寄与など、ごっこ遊びの意味や意義について、教育学や保育学、心理学等のさまざまな分野からの多くの知見の統合が必要と思われた。

近年、社会情動的スキルが重視されるようになった。OECD<sup>36)</sup>は、加盟9か国で行われた縦断的研究分析により、「whole child (全人教育)」を対象にバランスのとれた認知的スキルと社会情動的スキルを発達させる必要性を指摘した。また、教育者が子どもたちとの絆を深めて実際の学習経験を活用することで社会情動的スキルを発達させ得ること、とくに幼児期からの社会情動的スキルへの早期の介入が効率的にスキルを伸ばすこと<sup>37)</sup>などが報告されている。

我々は、小さな子ども達への教育の手段として、ごっこ遊びの保育の世界と発達研究、そして脳科学等の知見をもっている。今後ますます、他の分野の知見も統合しながら、幼児教育に活かしていかなければならないと思う。

<引用文献>

- 1) 倉橋惣三「幼稚園真諦」フレーベル新書10, 1976, p64-78 (倉橋惣三「幼稚園保育法真諦」東洋図書, 1934, 倉橋惣三「幼稚園真諦」フレーベル館, 1953)
- 2) 同上, p106
- 3) 森上史朗「子どもに生きた人・倉橋惣三」フレーベル館, 1993
- 4) 倉橋惣三「幼児の教育」第18巻第1号, 1918, p2-5
- 5) 森上史朗「子どもに生きた人・倉橋惣三—その生涯・思想・保育・教育」フレーベル館, 1993, p53-56
- 6) 倉橋惣三「幼児の教育」第24巻第2号, 1924, p36-47
- 7) 倉橋惣三「幼児の教育」第24巻第3号, 1924, p74
- 8) 同上, p77
- 9) 倉橋惣三「子供研究講座」第3巻(昭和6年刊)(大正・昭和保育文献集第8巻, 日本図書センター, 2010, p122-123)
- 10) 倉橋惣三「幼稚園保育法真諦」東洋図書, 1934
- 11) 倉橋惣三「幼稚園真諦」フレーベル館, 1953
- 12) 「幼稚園真諦」フレーベル新書10, 1976, p23-25
- 13) 同上, p42-43
- 14) 同上, p75
- 15) 同上, p80-81
- 16) 倉橋惣三「幼児の教育, 保育案—夏の講習の速記—」第36巻9号, 1936
- 17) 同上, p100-145
- 18) 同上, p109
- 19) 同上, p110
- 20) 同上, p112
- 21) 同上, p114-140
- 22) 倉橋惣三「育ての心」刀江書院, 1936 (倉橋惣三「育ての心」上下, フレーベル館, 2008)
- 23) 「育ての心」上, フレーベル館, 2008, p34
- 24) 「育ての心」下, フレーベル館, 2008, p8
- 25) 水野佑規子・白石淑江「倉橋惣三の誘導保育論にみるプロジェクト・メソッドの影響」愛知淑徳大学論集, 第8号, 2018, p14-27
- 26) 橋川喜美代「保育形態論の確立とコンダクト・カリキュラム—わが国に見るP. S. ヒルの生活形態論の影響について—」カリキュラム研究, 第7号, 1998, p39-51
- 27) 同上, p41
- 28) J. ピアジェ, 大伴茂訳「模倣の心理学」幼児心理学1, 黎明書房, 1968
- 29) 高橋たまき「想像と現実—子供のふり遊びの世界」ブレーン出版, 1989
- 30) 高橋たまき「想像と現実—子供のふり遊びの世界」ブレーン出版, 1989, p15-18
- 31) 同上, p97-116
- 32) 同上, p241-242
- 33) 研攻一・佐藤由紀「ごっこ遊びの見立て行動を育てるための保育の試み」羽陽学園短期大学紀要, 第10巻, 第2号, 2016
- 34) 青野香那恵・吉岡恒生「精神発達遅滞と診断された幼児のごっこ遊びの変遷—プレイセラピーを通して—」愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, 第4号, 2013, p55-62
- 35) 荒井庸子・荒木穂積「自閉症スペクトラム児における象徴機能と遊びの発達—ごっこ遊びから役割遊びへの発達過程の検討—」立命館人間科学研究, 26, 2013, p47-62
- 36) OECD編著「社会情動的スキル—学びに向かう力」明石書店, 2018
- 37) 同上, p19-23

<参考文献>

- 小山優子「倉橋惣三の誘導保育論の今日的意義—保育理論発生から系統的保育案の展開まで—」島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要, Vol.54, p27~36, 2016
- 太田素子・浅井幸子編「保育と家庭教育の誕生1890-1930」藤原書店, 2012
- 穴戸健夫「日本における保育カリキュラム—歴史と課題」新読書社, 2017
- 湯川嘉津美・荒川智「幼児教育・障害児教育—論集現代日本の教育史3」2013, 日本図書センター

